

台湾一苦悩の歴史

王育徳

Avanguard Publishing House, 2015

書評 : Aldric Hama

「台湾は台湾人のものであり、台湾人だけが台湾の真の主人である」

王育徳博士

中国国民党は、蒋介石総統に率いられて台湾へ逃亡して以来、自ら中国の正統政府であると主張し、中国共産党を排除して、「本土を回復」する計画を練って来た。一方、中国共産党は、台湾は中国の不可分の一部であると主張している。両者の間のいかなる「紛争」も「国内問題」だということになる。国民党は一貫して本土の政党であると自認しており、その後、統一を主張するようになった。ただし、中国共産党が消滅するのが前提だといふのである。しかし、台湾人の大半は、統一には反対である。自分たちは本土の中国人と同じではなく、かつ台湾は主権国家だと考えている。¹ 中国共産党が甚だしく困惑していることは、現在では台湾主権国家論が台湾人の心理の中に定着してしまっていることである。しかも、それは、1980年代に台湾の政治的自由化が行われ、国民党の社会的影響力が衰えた結果だというだけではない。本書「台湾一苦悩の歴史」は台湾の過去を中国からは独立した国家として、また近隣の強国に従属してきたの経緯を詳説している。

王育徳教授が「台湾一苦悩の歴史」を書いたのは1964年のことである。原文は日本語だったが、著者の没後、英語に翻訳され、2015年に出版された。著者は、1924年に台湾の台南に生まれ、高名な台北高等学校を卒業した。日本語は堪能で、続いて東京帝国大学で教育を受けた。日本の戦災がひどくなったため、王は台湾へ帰った。台湾にいる間に、王は国民党を批判する戯曲をたくさん書いた。日本が降伏すると、国民党が台湾に入って来て、甚だしい台湾人弾圧が始まり、それが頂点に達したのは「二・二八事件」だった。1947年2月28日から数日間にわたって、何千人もの台湾人が殺害された。王は東京大学に再入学して、「台湾語」で学位を取った。² 日本で語学の教授をしているうちに、台湾の独立に関して、日本人の援助を得ることに成功し、独立を目指す台湾青年社と

1 <http://www.taipeitimes.com/News/front/archives/2016/10/29/2003658136;>
https://www.washingtonpost.com/news/monkey-cage/wp/2017/01/02/yes-taiwan-wants-one-china-but-which-china-does-it-want/?utm_term=.46e8547568fe

² 王育徳の伝記作家は詳しいことを述べてはいないが、おそらくは福建語の台湾方言のことを言っているのだろう。

いう団体を結成した。これがのちに台湾独立建国連盟 (the World United Formosans for Independence) へと成長するのである。王は1985年に故郷を離れた亡命の地、東京で亡くなった。努力によって語学の達人となった王博士は、魅力的な話術を駆使して、優れた歴史家として、台湾の苦悩を訴えた。王氏が常に力説していたことは、台湾人は、外国の占領を受けても、一貫して自らを、個性ある自治の民族と看做して来たということだった。王氏令嬢が書いた一節に述べられているように、氏の目的は、世界に「台湾は中国に属していない」ということを完全に理解させることだった。

従来、「民族」あるいは「国民国家」とは、「実質的に共通の歴史・文化・祖先を、共有しているか、少なくともそう信じている人々から成る単位だと定義されてきた。³ 「国民国家」とは、事実上は拡大された家族の住む場所である。さらに言うならば、拡大された家族の目標と願望は、その政体に反映されており、またその政体が拡大家族の目標と願望とを尊重し推進する使命を担っている。市民の間の共通の文化的・歴史的・そしておそらくは遺伝的な遺産が、社会的調和の形成を促すのである。そして、そのような共通性や統一性が欠けている所では、社会的な結合は武力を用いなければ維持できない。

時が経つに連れて、たいていの「政治的に誤った」概念と同様に、民族とは、もはや基本的な共通性に依拠するものではなく、単なる便宜のためのもの、あるいは曖昧な包含概念に基づくものになってきた。台湾が単なる「国」に過ぎないのではないかという疑義を持つ人もいよう。つまり、この地域に住む人々は、共通の遺伝的遺産を欠き、文化的社会的な慣習や言語・歴史という点でもほとんど共有するものがないのに、地理的に定義されたに過ぎない領域ではないかと考えることも可能だということである。今日の政治的国家の中には、特にアフリカ諸国家の例に見られるように、たまたまその地域に住んでいた人々を寄せ集めて国家にただけ、というものが少なくない。それとは対照的に、ヨーロッパ、北アメリカ、東アジアの国民国家は、前々から頑固に、歴史的文化的遺伝的遺産を防衛し続けてきた。第二次世界大戦後、文化的民族的に多様な移民が流入し、民族性という概念もずいぶん変化して来た。大量の移民を奨励するのが現代政治の大勢である以上、もはや真の国家(state)というものはほとんど存在しないのかも知れない。

「独自性」および「結合」に関する王氏の感覚を皆が共有するものであるならば、台湾は中華帝国とは別の「国家」(国民国家)と定義することができよう。実際、王氏の主張によると、「台湾人と中国人との闘争」は「人種的」な闘争なのだという。「中国からの移民」である客家(はっか)と閩南(びんなん)民系の人々は、中国南東部の福建省や広東省の出身であり、明の万暦帝(1573~1620)の治世に、独自の「慣習と伝統と言語」を持って、

³ Pearson, R. (2004) The misuse of the term “nation state”. 「国民国家」という用語の誤用) *Mankind Quarterly*, 44, 403-418.

台湾に定着したのだった。この「移民」たちは、オーストロネシア系、マレー・ポリネシア系の「原住民」と遭遇し、肥沃な土地を求めて、彼らと争った。そして、結局、原住民を平原から中央部の高地へと追い払った。移民と原住民との通婚もあったらしい。一王氏は、「原住民の中には、漢族に同化してしまった者もいた」と述べている。⁴ 日本の敗戦の後、本土から多数の人々が流入した。しかし、今日の台湾人は、自分たちは完全に本土人とは別であると考えている。遺伝的にも文化的にも独特な伝統をもつ台湾は正しく国民国家の定義に当てはまっている。

本書は台湾の歴史に関する従来知識に挑戦する興味深い洞察を豊富に含んでいる。このような立場に立脚する氏のメッセージは、台湾は人民共和国に吸収されるべきだと叫ぶ人々から、相当な反発を受けることになるだろう。

大陸中国の台湾に対する要求は、長期的な視野を欠いている

王氏は、明も清も、台湾の扱いに困っている所があったようだと述べる。台湾は「無主の地」と看做され、経済的にも戦略的にも特に価値のない場所だった。中国当局は、移民を厳しく規制し、不法に台湾に入った者を送還した。それでも、客家と閩南民系の人々は、貧困と戦争に困窮して、台湾へ逃れた。台湾はすでに異民族に占領されており、中国の支配階級は、自分たちが天の秩序の中心にいて考えていたから、自分たちの支配を野蛮人にまで及ぼすことをあまり必要だとは感じていなかった。清朝が、介入しないで距離を置くという政策を取ったことが一因となって、台湾内部では反乱や暴動が頻発した。「不運な役人」だけが台湾統治のために派遣された。

中華帝国が徹底した反対をしなかったために、オランダ人やスペイン人などの野蛮人は、1600年代に台湾に根拠地を設けるようになった。当時、日本人も、台湾に恒久的に植民しようとして、台湾に進貢させようとしたが成功しなかった。王氏は、オランダの植民地支配を単純にただの搾取として斥けることはせず、オランダ人が台湾の「経済的領域」を拡大して、中国以外の地域とも通商をするように促し、その結果、「本土との経済的なつながりを弱めた」と指摘している。台湾経済の拡大ぶりは、オランダが「戦争に疲弊し、貧困におわれた」中国本土の農民移入を増加させるに至ったほどだった。オランダ人はさらに、「優れた移民」に自治を許した議会を設置させることまでした。結局、移民は、数に於ても力に於ても原住民をはるかに凌ぐことになった。中国人移民は不屈の精神を以て「大

⁴ Lin M. et al. (2001) 「HLA (ヒト白血球抗原) の研究から推測される、客家と閩南系 (いずれもいわゆる台湾人) の起源」。Tissue Antigens 57, 121-199 Chen, C-H (2016) 「現代台湾人口に占める漢族の人口構成—台湾バイオバンク・プロジェクトに参加した 10000 人を対象とした調査に基づく」 Human Molecular Genetics 25 号 5321-5331

地の霊」を圧倒する開拓者となったのである。そればかりでなく、オランダ人は原住民をも貧困から救出した。学校を建設し、始めて現地語を表現する書き言葉を与え、「原住民の知的レベル」を「著しく向上」させた。

オランダ人の統治の間に、中国人移民の経済力は向上したが、それでも、移民は、「紅毛人」を追放して、自ら台湾を支配しようとした。中国人移民は原住民を使喚して、頻繁に反乱を起こさせた。オランダ側はこれに対抗して、原住民を雇って、多数の中国人を殺戮させた。その暴力のせいで、本土からの移民は減少し、それにつれて、移民に依存していた経済も衰退した。これは現代に対する警鐘でもある。移民が人口減少を解決し、経済成長に役立つと信じている人々は考えなおしてみる必要がある。⁵ オランダ人は結局、清に敵対する将軍・鄭成功によって台湾から追放された。⁶ 1683年、鄭成功の孫・鄭克塽（ていこくそう）は清に降伏し、台湾は福建省に編入された。それにもかかわらず、清は原住民が犯罪を犯しても責任を取ろうとはしなかった。台湾の海岸に漂着した外国人が原住民に襲われて首を斬り落とされても知らぬ振りをしたのである。

日本の寛大な台湾統治

日清戦争の後始末として下関条約（1895）が締結され、台湾と澎湖諸島は日本に割譲された。これに反発する、本国に忠実な中国人は「台湾共和国」を建国した。この短命に終わった共和国では、清の旧官吏が行政と立法を掌握し、清朝への忠誠を誓っていた。台湾の治安確保のために日本軍が到着すると、台湾共和国の指導者たちは、逮捕を免れるために、我先に台湾から逃亡した。台北では、中国の将兵が「到る処で放火と掠奪を行った」。そのような行為は別段驚くほどのことではない。中国軍の作戦としては当たり前の手順だったのだから。⁷

⁵ 日本は、人口動態が変化してゆくにつれて、経済的な「危機」を回避するために、外圧に屈して、外国人移民の受け入れを促進している

<https://www.theguardian.com/world/2015/nov/26/japan-under-pressure-to-accept-more-immigrants-as-workforce-shrinks> しかし、外国人移民の増加は、その主唱者が信じているほどには経済問題の解決策になるわけではない。<http://www.npg.org/wp-content/uploads/2016/02/2016NegativeEconomicImpactForumPaper.pdf>

⁶ 台湾海峡の両岸で国民的英雄となっている鄭成功は、オランダ相手に残酷な戦争を戦い、女子供を含めたオランダ人捕虜に対して、四肢切断や斬首などを行った。オランダ人婦女子の中には、中国の司令官や軍隊に奴隷として売られた者もいた。(Nieuwhof (1703) Voyages & Travels into Brazil and the East-Indies. 2003年再版 ニューデリー インド。 Asian educational Services. Wells, S. W. (1849)「中華帝国とその住民」ロンドン Henry Washbourne

⁷ E. g. Bradley, J. (2015) China Mirage (中国幻想) NY, NY Little, Brown, and Col., Seki, H. (2007) A History of Massacres (中国大虐殺史) 東京 (石平 ビジネス社)

王氏は、明確に日本の植民地政策を非難している。日本の「中国に対する侵略戦争」とまで言っているが、これは日本に追従しているわけではないことを強調したいからであろう。王氏は常套的な反日史観に準拠してはいるが、歴史的な事実を歪めてはいない。

日本軍は台北に到着するとすぐに、この地が「豚と人間の同居する」ごみ溜めであることを知った。大抵の台湾人が、労働者か、あるいは「元労働者のビジネスマン」だったから、知的水準は「極めて貧弱」で、教育は「極端に遅れて」いた。その200年前に、オランダ人が努力したにもかかわらず、このときにはもう、人口の99%は文盲に戻っていた。台湾人の多くは、日本の統治が始まるまでは、教育も受けられない文字を知らない生活をしてきたのだった。

50年にわたる日本の植民地支配が終わった後、台湾は「ほぼ完全な資本主義植民地」となっていた。王氏の指摘によると、この50年間に、人口と可耕面積は倍増した。米の収穫高は五倍になり、砂糖の生産高は二倍になった。鉄道・道路など、交通の便を図るインフラ、また衛生状態を改善する上下水道も建設された。病院・大学・学校なども多数設置された。フランスの植民地経営と似た形で、日本も日本語教育を施すことによって同化を図った。王氏は述べていないが、これは国家的統一だけを目標とするものではなかった。西欧のノウハウは台湾語や中国語ではなく、日本語で書かれた。「近代的な日本の教育システム」の下で啓発された「新しい台湾人の世代」が誕生し、「国際的な視野と科学的な精神」を持つようになった。多数の台湾人がさらに進んで日本で教育を受け、それによって日本人との政治的平等を獲得しようという動きが進んだ。文化的社会的に日本人と同化した結果、台湾人は封建社会から脱却して、近代社会へ入って行くことができたのだった。

韓国も日本の植民地だった。そして、台湾と似たような経済的社会的変革を遂げた。それなのに、「韓国人は常に日本の帝国主義を世界で最も邪悪な性質のものだったと言って非難する」。王氏は「韓国と台湾の理性的な比較」をしている。面積当たりで比較すると、台湾は韓国の場合よりも、日本人将兵の数が多かった。植民地政府の内部では、韓国よりも台湾の方が現地人の数が少なかった。韓国では、韓国人が高等文官に任命された——日韓併合条約でそのように規定されていたからだった。⁸ 王氏はまた、台湾の方が韓国の場合よりも、抑圧的な政策が取られたと述べる。1895年から1902年まで、また1907年から1915年まで、暴力的な反日運動が続いたので、これを根絶するためだった。台湾語の新聞は一紙しか発行を許されていなかったが、韓国では、いくつもの全国紙・地方紙

⁸ 韓国人が政治的権力を持つ地位にいたということは、他の著作でも触れられている。(例) Ireland, A(1926) *The New Korea*, NY, NY, EP Dutton and Co.

を読むことが可能だった。台湾人は外国に占領されていることを不快には思っていたが、自治と平等の拡大を追求した。ところが、韓国人は、独立以外は受け付けない「オールオアナッシング」に固執した。したがって、王氏は、「日本帝国主義」は韓国を台湾ほどには抑圧していなかった、というのである。王氏はさらに、台湾における国民党の支配と日本の支配とをきちんと比較すべきだと言う—王氏は日本の支配の方がずっと好ましかったとまで言うのである。

「犬は去り、豚がやって来た：日本の敗戦に引き続いて国民党の独裁が始まった⁹

日本軍は1945年8月に、カイロ宣言とポツダム宣言に規定に従って、蒋介石総統に台湾を引き渡した。この両宣言を発するに当たって、台湾の人々は、自分たちの運命が決定されるというのに、何の相談にも与からなかった。米国と英国はただ、台湾が中国に属するのは当然のことだと決めてかかってしまったのだ。¹⁰ 実は、1912年に「中華民国」が建国された時点で、台湾はその一部に含まれてさえいなかった——日本の植民地だったのだ。台湾人の多くは独立を望んでいたが、結局、「腐敗した貪欲な」「豚」に支配されることになってしまった。

国民党時代をバラ色に描き出す人もいるが、ほとんど外国人向けのものだ。王氏は厳しい現実を示してくれる。蒋介石は北京官話を公用語と決めて台湾の掠奪に着手した。「台湾知事は、立法、行政、司法、軍事のどの分野に於ても、日本の統治時代のどの総督よりも、はるかに大きな権限を持っていた。やって来た国民党軍は無力な上に規律が行き届いていなかった。なんと、1960年代にも、国民党と一緒に、与太者のような本土の連中が多数流入し続けた。中には貧に喘ぐ者、精神的な問題をかかえた者も少なくなかった。ある人は、国民党支配下での頹廢をこのように表現している：台北は「見る見る廢墟と化して行った」。

抑圧が頂点に達したのは、「二・二八事件」だった。政府の役人たちが、非武装の市民たちに暴行を加え、発砲までしたのがきっかけだった。台湾人はこれに対抗して、「見る限りの中国人」（おそらくは新来の漢族）に暴行を加え、「中国人の所有する商店を焼いた」。国民党は台湾人の政治的自治を求める要求に屈する様子を見せたが、これはポーズに過ぎなかった。本土から国民党軍が到着し、「見る限りの台湾人に無差別に」発砲した。蒋介石は、

⁹ 台湾人は日本人を軽蔑的に「犬」と呼んだ。犬は吠えはするが守ってくれるからである。また、台湾人は中国人を「豚」と呼んだ。豚は食うだけで、他には何もしないからである。

¹⁰ それとは対比的に、カイロ宣言は、朝鮮を「自由かつ独立のものたらしむる」と述べている。また太平洋憲章は「すべての人民が、彼らがそのもとで生活する政体を選択する権利」を尊重している。しかし、明らかに、これは台湾人には適用されなかった。

「有害な日本式思考」と「有害な日本精神」を台湾から一掃するやうにと命じた。それは、日本統治時代に住んでいた多数の台湾人「知識人」と「重要人物」を逮捕し、拷問し、殺害するという形を取った。¹¹ 王氏は、この「白色テロ」による死者数は「数十万」に昇るものと推定している。しかも、台湾人はその後始末までさせられた。財産的被害も人命の損失も、すべて台湾人のせいだということになって、損害賠償責任を押し付けられたのだった。

1949年に国民党が大挙して台湾に到着すると抑圧が強化された。戒厳令が施行され、1987年まで効力を維持した。さらに台湾人の不幸のタネとなったのは、国民党と一緒に本土から二百万人がやって来たことだ。台湾島の人口は一気に20%も増加した。その大半は、蒋介石の私兵と党官僚（これを王氏は「中国人寄生虫」と呼ぶ）だ。国民党は無慈悲な土地改革計画を発表し、これによって農民たちは貧困へと追いやられた。教育に関しては新たな投資は行われなかった。うわべだけは民主主義の装いが凝らされたが、地方議会では、国民党が恣意的に当選者を決め、国民党以外の候補者には選挙妨害を加え、テロまで行った。その上、王氏の指摘によると、地方議会にはほとんど何の権限も与えられなかった。

国民党の抑圧にもかかわらず、米国は蒋介石を援助し続けた。その額は年間100万ドルにも及んだ。蒋介石はさらに、米国に対するロビー活動を拡大し、彼の「中国解放の幻想」を支援させた。これは明らかに、見果てぬ夢を追い、人民がその夢を実現してくれることを期待する誇大妄想経のリーダーの特徴である。それはまた、冷戦中の米国の政策にも合致していた。

日本のポツダム宣言受諾後の台湾の不安定な状況

台湾の主権問題は第二次世界大戦の終結とともに決着がついたと中華人民共和国は主張するが、決してそんなわけではないと王氏は指摘する。カイロ宣言とポツダム宣言は、少数の国々の一方的な要求に過ぎないものであり、法的な根拠を全く欠いている。無知な被害者を騙す詐欺師の手口に似ている。台湾は「戦利品」であり、国民党を連合国側に引きつけておくための餌玉だったのだ。¹² 台湾人民の意志は連合国にとってはどうでもよいこと

¹¹ 蒋介石は、第二次世界大戦の終結に当たり、美辞麗句を連ねて、日本との和解に務め、「我々は無辜の民間人を侮辱してはならない」と述べた。ところが、その一方で、台湾人の中の対日協力者に対しては、恐ろしい粛清を行った。(Dreyer, J. T. (2016) 「中華帝国と旭日帝国」NY, NY Oxford University Press

¹² 本書の27頁に、1943年のカイロでの、蒋介石、フランクリン・ルーズベルト米大統領、チャーチル、蒋介石夫人がいっしょに座っている写真を掲載している。撮影のためわざわざ集まったようである(??)。実は、ウィンストン・チャーチル首相は、中国が汎国などとは夢にも考えておらず、同盟国としての価値を一笑こけていた(Bradley, 2015, China Mirage)。ルーズベルト大統領は、蒋介石が日本を打倒してくれるものと信じて、米国人の税金を数百万ドルも国民党に寄贈していたのだ。

だった。政治的、社会的、歴史的に全く対照的ともいえる遺産を継承するエイリアンの襲来を受け入れるかどうかということについて、台湾人は一度も打診を受けたことがなかったのである。

王氏は1950年にトルーマン大統領の声明を指摘する。大統領は、台湾の地位は、「太平洋の治安の回復、日本の平和的安定、国連の判断」が定まった後に決定されることになると述べた。中華人民共和国は、米国を非難して、「台湾は中国に属する。これは、歴史的事実である」と宣言した。この宣言は、二・二八事件の直後に中華人民共和国が放送した、台湾の「自治」を支持するという声明とは著しく違っている：「諸君の闘争は我々の闘争である。我々は諸君を励まし支持するためにあらゆる努力を惜しまない」。明らかに、当時のこの言葉は、自分に都合のよいことを述べたに過ぎないものだった。

1951年、日本は講和条約を締結し、台湾の領有権を放棄したが、「継承国の指名は行わなかった」。それにもかかわらず、国民党は鉄の爪を伸ばして台湾を捉えた。国民党の正体が明らかになるにつれて、米国の考えも変わって来た：「非共産アジアに於ける台湾の新しい役割は、米国の政治家が振りつけることができるものではない。また、国民党の亡命者たちが台湾の大衆に独断的に押し付けることができるものでもない」

台湾の今日の現状維持を望んでいるのは、米国と中華人民共和国と国民党だけであるが、国民党は最近、大統領の地位を奪われてしまった。台湾人は中華人民共和国の「一つの中国」にも、国民党の大陸との統一政策にも反対している。

最後になるが、興覚めな話をしよう。原住民を描くときは、ロマンティックな物語にしてしまうのが現代の流行になっている。しかし、王氏は歴史の流れの中で、原住民にも容赦ない筆を揮う。他の地域（たとえばアメリカの原住民）では、原住民は突然の「悲劇」に見舞われる。しかし、王氏は、台湾の原住民が始めから破滅の運命に定められていた実態を見事に描き出している。彼らは外国人の行動によって破滅したのではなく、自らの行動が悲劇を招いたのである。放蕩の性生活、不潔な生活習慣に陥っていたうえに、飢餓や伝染病に対して何の対策も立てていなかった。

本書を読むと、読者は、原住民と漢族の移民とヨーロッパ人と日本人とを比較した場合の、洗練度の違いがどれほどのものかということを知ることになるだろう。原住民は「原始社会のどん底」にいて、「生まれつき好戦的」だった。（実際、大日本帝国陸軍の軍役に多数

の原住民が応募した)¹³ 原住民は漢字を読むことができず、またひたすら素朴だったので、中国人移民の詐欺の罠に陥ることは極めて多かった。

農業はほとんど素手で、女性の労働に任されていた。それとは対照的に男性は「生まれつき怠惰」で、「労働意欲がなく」、また「お天気屋」ばかりだった。「馬も牛も鋤も使われておらず」、オランダ人が来てから、やっと役畜が導入された。「通貨もまだ流通しておらず」、原住民の生活環境は徹底して貧困な自給自足経済だった。台湾の鹿皮には相当な需要があったが、原住民はほとんど数を数えることができないほどだったので継続的に鹿皮を供給することができなかった。「あまっさえ、過剰な狩猟のために台湾の鹿は絶滅に瀕した」。台湾原住民の文化的行動形態はポリネシア人を連想させる——最低水準の生活に甘んじる好戦的で勇敢な人々だったのだ。

本書の些細な欠陥を一つ挙げておこう。英語の校正にもう少し気を使って、読みやすくして欲しかったということだ。たとえば、「immigrants (移民)」の語が、あまりにも広範な意味に使われているので、「初期」の漢族の定住者を指すのか、後になってからの定住者を指すのか、あるいは、今日の中東の難民にも比すべき国民党を指すのか分かりにくくなっている。戦後になって台湾へやってきた漢族の難民は、社会変動の不幸な犠牲者ではあるが、王氏の指摘によると、精神的に不安定な人々が多く、衝動に駆られて殺戮を行うことがあったとのこと。

訳者は、著者の「心の叫び」に手を加えるのをいやがる余りに、この点に関して自分の考えを押し切った。その為に、書評子にはかえって、「心の叫び」が聞こえなくなってしまう。日本語の「心の叫び」を、正確かつ明晰な英語に移し替えて、日本人からも西欧人からも称賛を浴びていただろう。

将来、王氏の別の翻訳が出ることになったら、この点をよく考慮してもらえば、英語を母語とする人々にもっとよく理解してもらえることになるだろう。王氏は、台湾人は「声を上げない」と述べている——王博士の手に成る本書は、彼らの聞えぬ声の木魂（こだま）となるのである。

¹³王育徳が行ったことの一つは、第二次世界大戦の後に、日本帝国の軍隊の台湾人兵士のために、年金を獲得する支援活動だった。